
学会ニュース

日本女性学会

第28号 1986年3月

目 次

- 本会会員が行なった1985年の女性学に関する研究・活動報告(1)..... 1
- 第3回 国際学際女性会議のおしらせ..... 6
- おしらせ 8
- 研究報告会のおしらせ..... 9
- 幹事会だより 9
- <会員投稿>女性学と男性..... 田中由布子 10
- <会員投稿>タテマエの上のホンネ..... 大村 芳 昭 11
- 編 集 後 記 13

本会会員が行なった1985年 の女性学の研究・活動報告(1)

前号で、会員の皆様方に御報告頂いた研究・活動状況を誌上発表することになりました。まだ報告書を未提出の方々は、至急、事務局まで御返送下さい。

(※報告数の多い方の分は、適当に選択いたしました。)

氏 名	月 日	内 容	種 別 等
江 原 由美子	12・20	『女性解放という思想』勁草書房	女性学・社会学
高 橋 ますみ	2・15	「女性の生きがい」(豊田市)	} 地方自治体主催 講演等、他に 21回
	4・25	「女性と老人問題」(大垣市)	
	8・6	「女性学講座；女性の社会参加」 (彦根市)	
	11・20	「子育て後の婦人問題」(豊田市)	
	6・5	『何かをしたい主婦のために —主婦の壁を破るセミナーの記録』 学陽書房	
竹 中 恵美子	5・	「雇用における性差別—“機会の平等”と“結果の平等”によせて—」 『労働者世界を求めて』日本評論社	
	4・	『私の女性論』啓文社	
	6・	「保護と平等論議の現段階」 『ジュリスト増刊第39号夏、女性の 現在と未来』有斐閣	
	9・	「女子労働の再構成—雇用における 性分業とその構造—」『社会 政策学会研究大会・社会政策叢書 第9集・婦人労働における保護と 平等』啓文社	
	11・	「現代における家事—歴史の流れ の中で—」『岩波講座・女の一生⑤ 家事・子育て』岩波書店	

氏 名	月 日	内 容	種 別 等	
しま ようこ	4・	『フェミニスト・サイコロジー』勁草書房		
	4・	総合講義「女性学」を開講 「社会と家—女と男の立場から」	※渡辺澄子氏ら他2名 と共に(教育活動)	
浅野 美和子	6・	「如来救済思想の特質」『日本史研究』第274号	日本女性史	
村田 鈴子	3・	「Women's Studies に関する一考察 I」		
	7～9月	『群馬県立女子大学紀要』第5号 インディアナ大学、ハーバード、ウェズレ-女子大学、MIJの Women's Studies の調査		
金子 幸子	2・23	「女子労働の歴史」(茨城県谷田部町・女性史講座)	講演	
	3・29	「日本におけるJ・S・ミル、女性解放論の受容」(日本婦人問題懇話会)	報告	
	6・23	「婦女新聞・1901年」(総合女性史研究会近代史部会)	//	
	10・	「大正期における西洋女性解放論受容の方法—エレン・ケイ『恋愛と結婚』を手がかりに—」『社会科学ジャーナル』第23巻1号		
	11・29	「金城清子著『家族という関係』を読んで」(品川区婦人講座「主婦」を考える)自主グループ)	報告	
	北沢 杏子	8・17～22	「性差を性差別に結びつけないために」「…らしさは後得的なもの」(佐賀、唐津、長崎、福岡)	8回講演
		8・8	「母と女教師の会全国大会」(東京)の講演と助言者	

氏 名	月 日	内 容	種 別 等
矢 木 公 子	12・11～ 13	「手話が性差別的に使われていることについて — ルポ」(毎日・東京新聞 京都・吹田)	障害児教育・同和教育に欠けている女性学的視点の問題提起
	2・9	小指を立てて「わたしはこれで会社をやめました」禁煙パイポのTV・CFが女性差別であるとして、シャルマン社長に抗議	CMに対する抗議活動
	6・5	「女の服装」『女を装う』勁草書房	
	10・	「ナイロビ世界婦人会議 NGOフォーラムに参加して」『じょうさい』第28号	
	10・16	「歴史の中にみる女性」(柏市)	講演
富士谷 あつ子	1・	「女子労働と事務迄を全サービスⅡ テンポラリーワーカーの実態と意識」『城西大学女子短大部紀要』第2巻1号 1985年度国立婦人教育館女性学講座共同企画委員	
	11～	「国連婦人の10年における地方自治体の女性関連施策の実情に関する調査」(725自治体対象) 「女性学講座」等(国立婦人教育会館、沖縄、大分、岡山等自治体主催) 「京のおんな大学」設立15周年 各種事業	※日本女性学研究会、 教育教会議共同研究 講演 女性学の視点から女性のライフ・ヒストリーを記録することを中心に
中 村 恭 子	6～	シラ・マクリーリ「女性の外性器切除」を翻訳・印刷し「行動への呼びかけ」を付し、ナイロビ会議出席者その他に配布	手術廃止に向けて世論づくり活動
田 嶋 陽 子	5・18	「“新しい女”を考える — 小説とフェミニズム」日本英文学会57回	パネラー

氏名	月日	内容	種別等
青木 やよひ		大会シンポジウム「<家母長>の出現」	
	6・15	「自分の足を取りもどす」『女を装う』勁草書房	
	12・1	「靴は元気のもと」『Personal』日経ホーム出版社	
	3・	「フェミニズムの未来」『現代思想』1985年4月号	
	9・	シンポジウム『フェミニズムはどこへゆく』松香堂	5月パネラー
	11・	「文明と女性」『比較文明』創刊号 刀水書房	論文
	6~12	「連載対談 母性をさぐる」『青年心理』	
久民 三千子	4~12	映画「中絶 — 北と南の女たち」	上映主催者およびパネラー 他にパネラー、編著、単行本、講義、研究発表等各1件ずつあり
	1~12	「人間関係学セミナー」	研究活動参加
	4~9	諸外国(米・独・中国・スペイン等)の婦人教育体制研究 「男と女の社会的役割の変化とその両者の関係余白に存在するもの」	ソフトエネルギー研究
田川 建三	12・	「対幻想”男の作った”女のイメージ」『インパクション』第39号、イザラ書房	
柳 美代子	4・6~毎週	「女のハウジング」『リビング福岡』	
	土曜日連載 隔月	『リビング北九州』西日本新聞社 フェミニスト・デザイン研究会	住居計画の女性学部研究

氏 名	月 日	内 容	種 別 等
大河内 保 雪	3・16	「19世紀ドイツ・ザクセン邦における 医学者の女子学校体育論について」 (第12回東京体育学会)	報告
	10・24	「19世紀ドイツ女子学校体育の歴史」 (茨木大学特別講義)	
漆 田 和 代	3・23	「女性学と文学」(女性学研究会)	報告
	10・19	「自分を育てるための心理学」 (中野区婦人問題総合講座)	講演
村 上 益 子		○個人主義の立場からみた両性具有 性の研究	哲学
		○エーリッヒ・ノイマンにおける人格 内部での両性の対立と統合の問題	〃
		○ジンメルという景的个人主義と質 的個人主義との対比からみた両性 具有性の検討	〃
		○ボーヴォワールにおけるミニマリ ズムの批判	〃
		○ハリッチにおける二元論と位置づ け	〃

(2月19日現在までに受理したもの。順不同、敬称略)

第3回 国際学際女性会議のお知らせ

開催地 アイルランド、ダブリン大学、トリニティ・カレッジ
日時 1987年7月6日～10日
テーマ ビジョンとリビジョン(展望と見直し)

会議の歴史と目的

国際学際女性会議(International Interdisciplinary Congress of Women)は3年ごとに開かれます。その目的は、広汎な教科、専門領域にわたる研究者、実践家が集まり、洞察、経験、研究を交流しあい、世界中の女性にとって重要な諸問題を探究することにあります。

第1回の会議は、「女性の世界—新たな学問」をテーマとして、1981年12月、イスラエルのハイファ大学で開かれ、35カ国600人の女性と男性が参加しました。つづいて、1984年4月にオランダの Groningen 大学で「力をもつための方策」をテーマとして第2回会議が開かれ、45カ国650人が出席しました。

女性の世界1987—ビジョンとリビジョン(Visions & Revisions)

1987年会議にこの包括的なテーマを選んだのは、諸科学、医学、医療・保健、人文科学、創造美術、開発、政治、教師、産業等、諸分野の研究者、理論家、実践家が世界中の女性の世界の知識と理解をひろげ深めるためです。すなわち、私たちの過去を解釈しなおし、現在の経験を検討し、将来展望を創りだそうという理由からです。

提案を求む

プログラムは、会議テーマ「女性の世界—展望と見直し」に関連する理論的および応用諸問題を扱う学際的、通文化的セッションを含みます。

現在考えられているトピックス

- 私たちの過去を取り戻す — 歴史、民族学、考古学
- 核の脅威 — 女性と軍備拡大競争
- 私たちの展望を表記する — 創造、文学、芸術
- 言語、意味、コミュニケーション
- 社会化および性役割を変えること
- セクシュアリティとエロティシズム
- フェミニストの異議申立に対する男性の反応
- 女と仕事

- 女とテクノロジー革命
- 自然科学 — フェミニズムとの関係
- 産む産まないの自由とリプロダクティブ・テクノロジーの発展
- 法と政治
- 女、経済開発、労働関係
- 力とリーダーシップ
- 貧困の女性化
- 開発における女の役割
- 健康と医学・医療
- 環境問題
- 宗教、霊性、フェミニスト神学の挑戦
- 抑圧と暴力
- 女性学 — 評価と発展
- 教育
- 哲学と理論

組織委員会は、これらテーマにかんするペーパー、パネル、シンポジウムの提案を歓迎すると共に、上記以外のタイトル、関心分野を示唆されるよう求めます。

締 切 り

提 案 1986年 2月1日

要 旨 1986年10月1日

要旨作成のためのガイドライン

- 1) 200～400字詰程度をタイプすること。
- 2) タイトル、著者名、所属、国名を明記すること。
- 3) 要旨はできるかぎり情報量の多いものであること。
 - イ) 具体的な研究目的をのべる。
 - ロ) 用いられる方法をのべる（関連ある場合）
 - ハ) 得られた結果を要約し、到達した結論をのべる。

○ 組織委員会

オードレイ・ディクソン（女性の地位委員会会長）

マーガレット・ファイン＝ディビス（トリニティ・カレッジ、心理学部）

キャロライン・マッカームリー（女性の地位委員会副会長）

シルビア・ミーバン(雇用平等局長)

エイルベ・スミス(ダブリン・ユニバーシティ・カレッジ・仏文学部)

組織委員会は集団として活動し、また、国内および国際助言委員会の貴重な助言、援助、支持を受けています。

○国際助言委員会(International Advisory Board)

(略、但、日本からは藤枝滯子が参加しています。)

○二次発表

正確なプログラム、登録にかんするくわしい情報は、1986年後半に発表されます。

○公用語 英語

○宿泊 ホテル、キャンパス、ホームステイなど

(文責 藤枝 滯子)

お し ら せ

強姦救援センター閉鎖の危機を救援しましょう!!

強姦救援センターが財政難のため、閉鎖されようとしています。カンパ、会員募集、どんなかたちでも御協力下さい。

研究報告会のおしらせ

テーマ：しまようこ著「フェミニスト・サイコロジー」を読む

コメンテーター：加藤春恵子・賀谷恵美子・河野貴代美

とき：4月5日(土)午後1時半～4時

会場：新宿区立婦人情報センター

東京都新宿区荒木町16 TEL (03)-341-0801

地下鉄 都営新宿線曙橋下車2分

// 丸の内線四谷3丁目下車5分

※ なお、終了後幹事会が開催されますので、自由に御参加下さい。

幹事会だより

- 別便で1986年度会員名簿と幹事選挙のための投票用紙等が届いていることと存じます。前号でお知らせしたとおり「幹事選挙に関する内規」に従い、今回の選挙には現幹事会が選挙管理委員会を代行しますが、次回の選挙規定作成にあたっては、「選挙管理委員会は、現幹事若干名と一般会員若干名で構成する」と改正するよう申し送ることが、2月8日の幹事会の席上で決定いたしました。(現幹事の任期は、1986年度総会まで)
 - 1986年度の総会および関連行事の日程は5月31日(土)、6月1日(日)の2日間(会場未定)に予定されることになりました。このうち、シンポジウムのテーマは「日本の文化的土壌とフェミニズム」に決定し、シンポジストを交渉中です。また、分科会は先のアンケートにより発表希望者は以下のとおりです。(2月19日現在)
 - 福井 浅子 — 女性学と婦人福祉
 - 田中 由布子 — マルクス経済学が無視してきたもの
 - 中村 恭子 — 女性の「割礼」について
 - 北沢 杏子 — 性教育の立場からみた世界の女たちテーマ未定：大村芳昭、村上益子、大河内保雪
- なお、このほかにも講演、懇談会等が企画されていますが、詳細は次号で発表いたします。
- 上記の幹事改選にともない、3月29日(土)午後1時半～7時まで、新宿区立婦人情報センター(研究報告会の項参照)において、幹事会が開催されることになりました。自由に御参加下さい。

< 会員投稿 >

女性学 と 男性

田 中 由 布 子

女性にとって、女性学とは全体性のある自己の世界観の問題であるが、男性にとって、女性学とは一体何だろうか。女性にとって、それは世界史を賭けた、従ってまた全世界を賭けた世界観、人生観の問題であるが、男性にとって、それは一体何なのだろうか。ここではそれについて、少し考えてみたい。

男性にとって、女性とは世界史以下の、従ってまた世界観以下の人間存在であり続けた。男性にとって、女性とは決して自己の世界史以上に、世界観以上に登場することのない人物であった。

自作自演の男性は、歴史や世界観という大ドラマとその筋書きに、端役以上に女性を使用する気はなく、あってもやむを得ない場合に限られるものであった。女王や摂政として、あるいは女性科学者として主役を回すこともあったが、限られたもので、世界史や世界観といえば男性のものであった。

主役以下の人生を送ってきた女性が、これから自己のために、自作自演の大ドラマを書き上げるとすれば、逆にそういう女性学が、男性をどう扱ったらいいのか、それがここでの課題である。それは、男性が女性学に関与する場合、男性に女性学はどうあることが望ましいか、という女性学関係者からの、男性とその科学に対する態度の決定でもある。男性が関与して来るのは、女性学に対してのみならず、女性解放運動にもであるが、ここでは女性学関与者に限定して考えたい。

女性学は結果分析の学としての婦人問題から、新しく、原因究明の学としての女性学を成り立たせようと、マイナス地点から出発したのであるから、女性の学として女性学を捉えることは、その出発点から男性は誤っていることになる。女性学とは、むしろ男性学なのである。つまり、原因究明の学として女性にも、男性にも、男性の批判的な支配分析の学、それが女性学のめざすところなのである。女性のため、女性の学をやってやろうと施し感覚で、女性の中に被支配の結果分析を行なっても、それは新しい学とはなりえない。“婦人問題”の延長線上に新しい学を打ち立てようということが目標でない以上、女性を下位概念化したまま、男性が“婦人問題”から“女性の学”へ転換しても、何らその研究の質は変わらない。女性を下位概念化したまま、自己の支配の結果を女性の動きの中に読んでいるという意味で、本質は同じであるからだ。

女性の中に“婦人問題”や“女性の学”を追求するのではなく、自己の中に原因究明すること、男性にとっての女性学とは、実はそういうものなのだ。女性の中にその学を求めようとした男性は、直ちに男性学へ転換することを求められる。自己を含めた男性全体が、社会や学問世界で、

女性下位化の歴史と方法を辿ってきたことの自己分析、そこに女性学としての男性学が存在するのである。女性への、社会的、学問的上乗り構造から降りつつ、外在的に自立する女性学と女性社会へ対応を変えていくこと、男性にはそれが望まれるのである。外在的に自立する女性学と女性へ、いかなる対応関係を築いていくかは、既存科学と既存社会の変身力の問題である。女性への既存科学と既存社会の支配的攻撃性は、いずれ迎え撃たれることになる。女性は、すでに男性の足元にいず、その攻撃性を迎え撃ちつつ、既存科学と既存社会に旋回を迫り、自己の外在的自立空間を確保しようとするからである。

女性に迎え撃たれ、その支配性の中に女性の自立空間をこじあけられるとき、男性は厭でも対応の変化をしざるをえない。女性が迎え撃つ既存社会と既存科学は、旧来のままで、外在的な女性の旋回力に対し、まだ新兵器を発明しているわけではない。女性に、旧来の武器が通用しなくなった男性は、新しい知のパラダイムを準備しざるをえなくなる。女性に対する、新しい学の創造なしには、男性の側がやっていけなくなるからである。女性が彼らの足元にいず、逆にその学の旋回を狙うとき、男性もまた、トータルに新しい学の創造で応えるより他に方法はない。

女性学関与者とは、実は、既存科学の旋回点となるべき人々である。女性学へ触れるとともに、既存科学へ向き直り、「変身せよ、既存科学！」という唱い文句のラウド・スピーカーとなり、女性学対応的な、新しい学の創造を男性と既存科学の方で、スタートさせるべきことを男性に向けて広報すべき、尖兵部隊なのである。女性には、自ら建設と破壊を目標とし始めるとき、男性とその科学のあり方はさしあたり、どうでもよく、女性の第一義的問題ではなくなる。しかし、女性学関与者の場合は、既存科学に向き直る意思のない者は、女性の視点により、女性学の中で淘汰されていくということだ。男性が、女性のために新しい学の創造を、自己の側でスタートさせるとき、女性を科学が包摂することをやめる。女性の反撃に、古い武器が役に立たなくなる以上、自己の学的アイデンティティを保つためにも男性は、女性に対する学的対応を変えざるをえなくなる。

女性学とは、女性の学ではない。男性は、まずそこからスタートすべきなのかもしれない。

< 会員投稿 >

「タテマエの上のホンネ」

大村 芳 昭

私がほんの偶然から女性学を知って以来、二年が過ぎようとしています。その間、自主ゼミをはじめとする様々な場面で、私は私なりに男女平等について考えてきました。

そんな中で、常に気になっていたことがありました。「どこか浮いている」つまり、現実社会での生活と、男女平等についての考察が、何となくどこかで乖離しているような感じを否めなかったのです。現実に応用しつつ生きている自分と、女性学の理想に燃える自分が、同じ肉体の中で二極に分離しているかのようでした。その「ふたつの自分」をじっくりと見つめ直すこともないままに、私は今まで、現実に応用してしまっている自分を何とか理想の方に引き寄せようとして来ました。

しかし、最近になって、ようやく私は「ふたつの自分」にしっかりと目を向けるようになりました。そのきっかけとなったのは、ある友人との会話と、公開自主講座「公害原論」最終講座に於ける竹内宏さんのお話でした。友人との会話の中では、「ホンネがあるのにそれを出さずにタテマエで飾るのは正直でない」ということになり、またその友人から、「男女平等を語るにしても、男と女に生来的に異なる点があるならば、それをはっきりと認識した上で論ずるべきであって、徒らに男女の差異が生来的でないとの主張をするのには疑問を持つ」旨の指摘をうけて、私は相当考えこまされました。その数日後、「公害原論」最終講座では、竹内宏さんが講演の後の質疑応答の時、「タテマエで話すのはやめにしましょう」とある質問者に向かって言われたのですが、その瞬間、私は前述の友人との会話を思い出し、また考えこんでしまったのです。

考えを進めるうちに、私は「ふたつの自分」を再認識すると共に、自分が今まで考えてきた男女平等論は、どこかで自分のホンネから離れていたのではないか、と思うようになりました。確かに、私は今まで単なるタテマエ論に100%終始していた訳ではありません。しかし、男性中心社会にどっぷり漬かって生きて来た自分(あるいは男性一般)を嫌う余り、根本的なところで、「理想論」を組み立ててしまい、その上で、男の子の社会に応用できずに来た自分のホンネをぶちまけていたような気がするのです。

考えてみれば、私が現在のような女尊男卑的傾向を有するようになったのも、元来は自分をも含めた男性の女性に対する態度に反感を覚えたからなのだし、その根底には、男尊女卑的傾向の存する男性中心社会への被拘束性が厳然と存在するのです。

いくらホンネを吐いても、それが理想論の土台の上に乗っている限り、我々は安心して議論することができます。しかし、そのような議論は結局、現実にはしっかりと根をおろしていない空論に陥ってしまう危険性が高いのです。何時間議論しても、最終的には内論受けに終わってしまう大学生の議論のようなものです。

女性学が現実世界の改革を目指す以上、それは現実から出発しなければなりません。故に私は、今後「タテマエの上のホンネ」から脱却すべく努力することにしました。しかし、タテマエを脱した上で理想を追うのは困難です。現実にはひきずられて理想を見失うことにもなり得るのです。

それでも敢えて私がこの決心を固めたのは、「自分に正直になれずに他人を説得することなどできる訳がない」と思い定めたからです。自分たちだけが何となく納得しあっておればよい、などというのなら、それは女性学に名を借りた自慰行為に過ぎないのです。

そんなわけで、今回の投稿はひとつの決意書として書きました。今後も諸先輩の御教導を御願います次第です。

編 集 後 記

毎年のことながら、立春を過ぎてから日本は冬になります。ときどき旧暦をみては一人納得しております。

ところで、手作りの日本女性学会のため第27号の送付に関して、一部の方に御迷惑をおかけしましたこととお詫びいたします。合理的、経済的運営とともに、魅力ある会にしてゆかねばと心は焦るのですが……。

今回は、田中さん、大村さんの原稿を掲載しました。お2人の提言の取り合わせがおもしろいと思います。

(亀山)

学会ニュースでは、常時、皆様からの御意見レポート等を受けつけておりますので、御投稿下さい。なお、原稿はお返ししませんので、必要な方はコピーをおとり下さい。

発行 日本女性学会

〒350 川越市三久保町13-1 川越郵便局私書箱35号

(郵便振替口座 東京 8-49189)
住友銀行日本橋支店 普通口座 451169)
